

Felice Anno Nuovo / (フェリーチェ・アunno・ヌーヴォー)——直訳すると「新年が良い年でありますように」となります。

イタリアの大晦日は、友人たちとパーティーを開いたり、レストランや劇場、リゾートなどでチェノーネ(豪華な夕食)付きの完全予約制イベントに参加したりするのが一般的です。

夕食では、地域によって多少の違いはあるものの、富をもたらずといわれるレンティッキエ(レンズ豆)やコテキィーノ(豚肉の腸詰め)を頂きます。そして、イタリアのスパークリングワイン「スプーマンテ」を飲みながら新年を祝うのです。

また、赤い下着をつけて新年を迎える習慣があり、縁起担ぎとして古くから広く受け継がれています。

年末のもう一つの大イベントはクリスマス。イタリアはカトリックの本家本元なので、クリスマスイブとクリスマス

マスは、当然ながら、その意味合いが強く反映されます。クリスマスイブは、イエスが人間として誕生した、いわゆる「精神的な準備段階」ともいえます。復活祭と同様、

境界に生きて

ローマからの便り

大ローマ布教所ようぼく

山口さやか

イタリアの冬休み



絵・遠藤真千子

が日本でも流行しています。ラテン語に由来する「アドベント」という言葉は、カトリックでは「待機する」の意味合いが強く、クリスマス前の4週間を指します。最終日の24日夜には、魚介類を食べるしきたりがあります。

ることができなかつたため、粗食を意味する魚介類を食べるようになったといわれています。

「存じの通り、イタリア料理のフルコースはオードブルに始まり、ボンゴレ(大ぶりのアサリを用いたパスタ)あるいはポツタルガ(からすみのパスタ、そしてメインディッシュのハタのオープン焼きと続きます)。

クリスマス期間は、1月6日の「エピファニー」(公現祭)という祝日をもって幕を閉じます。

5日の夜には、魔女が箒に乗って、子供たちの靴下の中にお菓子を入れに来るといわれています。これはイタリアに定着した「ペファナー」と呼ばれる風習です。この日、子供たちはお菓子を食べながら、冬休みの宿題に追い込みをかけます。

この間、唯一世俗的なカポダンノ(元旦)を挟んで、イタリアの冬休みは終わります。

カトリックにとって最も重要な行事の一つであり、国民たちは家族とともに、この2日間を過ごします。

最近、お菓子などが入った「アドベント・カレンダー」